スターウォーズ　伝説の賞金稼ぎ

Slave0629 らい

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ひょんな事から賞金稼ぎのチームに入って任務に参加することになった新人賞金稼ぎのキーラ・ライトレイ。入った当初から違和感を抱えていたが、どうやら訳ありらしいチームにのメンバーの振り回され、状況は悪くなるばかり。かつてないほど危険な任務を成功させられるかはお互いを信頼できるかにかかっていた。

目次

伝説の賞金稼ぎ　第1章　1
伝説の賞金稼ぎ　第2章　16
伝説の賞金稼ぎ　第3章　27
伝説の賞金稼ぎ　第4章　43
伝説の賞金稼ぎ　第5章　58
伝説の賞金稼ぎ　第6章　74

伝説の賞金稼ぎ　第1章

遠い昔、遥か彼方の銀河系で・・・

コンコード・ドーン

ならず者の集い場

時は１ＡＢＹ、帝国の占領下にあったコンコード・ドーンの居住地区は基本的にはどこも静かな場所だ。戦い好きのマンダロリアンが多く出入りする基地の隣に位置するこの地区も一カ所を除いては今日も住民が穏やかに暮らしている。

「おいクラーク、酒はまだか！」

「うるせえぞ、この頭でっかち！」

「早く持って来ねえとぶっ殺すぞ！」

居住地区のど真ん中にあるこのパブは朝から夜まで多くの客が押し寄せる。戦いの疲れを癒やしにやって来るマンダロリアンの戦士や燃料を足しに星に降りたついでに立ち寄った旅人、情報交換にやって来たならず者たち・・・様々な種族や職業の輩を眺

めるのはここで働くミッチ・クラークにとって楽しみの一つだった。店は昼頃になるといつの間にか人間やクリーチャーで溢れかえり大忙しだ。店内に並ぶいくつもの丸テーブルとカウンターの席はいっぱいになり、客が取り合いを始める。暇になったら店内を見回して初めて見るクリーチャーなどについてアーボルトに教わるのだ。ただやっかいなのは、先程みたいに酔っぱらった客が喧嘩をふっかけてくることだろう。ベーシックを話す奴らならまだしも、訳の分からない言葉で唸られても、ミッチにはどうしようもない。アーボルトなら話は別だが。

また店の扉が開いて、新たな客が入ってきた。赤いマンダロリアンのヘルメットを被ったその客は凜とした歩みでアーボルトとミッチのいるカウンターの目の前の席にまっすぐに向かってくる。空席にどっかり座ると肩にかけていた重そうな鞄をカウンターにドサッとおろした。

「ブルーミルク。」

ヘルメット越しのくぐもった声で客が注文した。この店で酒以外の物を注文する客はほとんどいないがアーボルトは驚いた様子もなく素早くカップにブルーミルクを注ぎミッチに投げた。ミッチはカップを受け取り客に出しながらにっこり笑って言った。

「お帰り、キーラ。」

「見つけた?」
「ああ、奴だ。」
端の方の暗いテーブルを囲んだタロン、サム、ステラトの3人は周囲に目をこらして目当ての人物を探していた。周りは皆楽しそうに話している中で物騒な雰囲気を醸し出し口数の少ない彼らは明らかに浮いていたが本人たちは気にしていないようだ。とうとうタロンが何かに気付いたように2人に目配せをした。
「あの弓を背負ってる奴か?」
「ああ、恐らくな。我々が狙っている人物に合致する。」
3人はタロンが捉えた人物を目で追った。何やら熱心にカウンターの青年と話しており、時々青年のほうの声が聞こえてくる。
「こんなに都合の良い事ってあるかしら。」
「ああ。これでまた僕たちの株が上がるわけだ。」
「よし、それじゃあ俺がやろう。」
そういうとタロンはのっそりと椅子から立ち上がり腰にブラスターがついていることを確認すると、静かにその人物の方に近づいた。
突然ガシッと肩を掴んだので、相手は驚いてブルーミルクのカップを落としてしまった。ズボンに青い染みが広がる。怒って肩を掴んできたタロンの方を振り向いた。

「ちょっと、どうしてくれるのよ！」
「あ、すまない・・・」
　カウンターの青年が床にこぼれたミルクと砕けたカップを片づけにきた。まだ一口も飲んでいなかったらしい。せっかくのブルーミルクが台無しじゃない、と息巻く彼女に謝りながらも、タロンは相手が女性で、しかもパブでブルーミルクを飲んでいるという事実に驚きを隠せなかった。
「未成年か？」
「さあね、大人だってブルーミルクを飲むでしょ。ところで、私に何か？」
　さらっと年齢をごまかす彼女にタロンはゴクリと息を飲んだ。慎重にいかなくては。彼女を逃せば二度とないチャンスを失うことになる。
「協力して欲しい。君、賞金稼ぎだろ。名前は？」
「そういう時は普通自分から先に名乗るものよ。」
「俺はタロン・バートン、君と同じ、賞金稼ぎだ。」
　彼女は興味がなさそうにふーん、とタロンを眺めると、
「ボバ・フェット。」
　と名乗った。実際に会ったことはないが銀河系の賞金稼ぎの中でボバ・フェットを知らないものはいない。銀河一腕利きの男の賞金稼ぎだ。騙せているとでも思っている

のだろうか。それとも冗談か。マスクを被っているので表情も読めずタロンは後者の可能性が高いと判断し冗談に乗ることにした。
「それはそれは。お会いできて光栄だ、ボバ・フェット。」
「冗談だって事が分からないの？」
「・・・お前もな。」
「アウトロー・レッドよ。」
　そう言って彼女は被っていたマンダロリアンのヘルメットを脱いだ。未成年かどうかは分からないがかなり若い。店内の照明のせいか、青白い顔をしている。アウトロー・レッドというのもまた本名でないことはもちろん分かったが、今は尋ねないことにした。
「実は、一緒に働く賞金稼ぎを探している。マンダロリアンならなおさら良い。」
「どうして私がマンダロリアンだって分かったのよ。」
　は？思わず声に出しそうなのを寸前でこらえ、タロンは不思議そうに首をひねっている彼女を見返した。
「それは、アーマーを着ているだろう。マンダロリアンの。」
「あ、そっか。・・・でも、関係なくてもマンダロリアンアーマーを来ている人はいるわ。」
　こいつ、意外とドジか？タロンは期待した通りの人物でなかったことに少しだけ落胆

した。いや、しかしそういう振りをして相手を油断させているだけかもしれない。タロンは慎重な態度を崩さないまま本題に入った。
「帝国からの任務だ。複雑な任務ではないのだが、人数が必要だ。仲間に加わって欲しい。」

彼女がタロンを信用していないことは態度で明らかだ。賞金稼ぎの性ではあるが、任務は詳しく話したし、賞金も山分けで良いと言ったのだ。
「２０００万クレジット?帝国が本当にそんなに賞金を払うとでも?信用できない。」
タロンは他の客に話を聞かれないように声を潜めながら周りを気にして言った。
「直々に頼まれたんだ。悪い話じゃないだろう。成功すれば、一人５００万クレジットだぞ。」
確かにタロンも初めは信じられなかった。だが本当の話だとしたら挑戦する価値はあると思う。
「そんな怪しい契約に命を捧げる気はないわ。他をあたって。」
「色々な星を回ってやっと賞金稼ぎを見つけたんだ。頼むよ。任務が終われば君は金だけ持ってチームを抜ければ良い。」
そう言われてレッドは少し首をかしげた。少々無礼な言い方だったか。今まで誰か

と組んで仕事をしたことはないらしい。しかしなかなか承知しなかったレッドだが、次のタロンの発言が彼女を動かした。
「いいか、あの基地の最高司令官はあのミフ・アボットだ。殺るのは不可能と言われているが、もし彼を倒すことが出来れば・・・」
レッドの目の色が変わった。しばらくタロンをジッと見つめていたが、やがて口を開いた。
「分かった、乗るわ。」

タロン、サム、ステラトにレッドを加えた4人はアーボルトのパブの裏方で彼が部屋の中央のテーブルで映し出したホログラムの地図を眺めていた。実はタロンらがこのパブに来たのは賞金稼ぎを探すためだけでなく、アーボルトに協力を得るためでもあった。情報屋のアーボルトに知らない星はなく、ほとんどの種族や言語にも精通しているという噂を聞いたのだ。店の奥にあるアーボルトの部屋は店とは違い薄暗く静まりかえっていて、数え切れないほどの本や見慣れない何かの道具、使われていない武器などでごった返していた。アーボルトはこのパブを開く前は海賊のギャングにいたと聞いている。色々な星を回って集めた物なのだろう。
「マルーン星系か。」

「ああ。どういう星か教えてくれ。」
　タロンは一分一秒が惜しいとでも言うようにアーボルトに続きを促した。
「未だに帝国の支配下に置かれていない惑星の一つだ。わしも行ったことがないから実際の所は知らないが、惑星全体が岩に覆われているらしい。日中は外に長い間いると岩が反射した太陽の熱でやけどをする。反対に夜は外は凍え死ぬぐらいの寒さだ。オアシスがいくつかあって、おそらく反乱軍の基地があるならそこだろう。」
「どうりで帝国が手を出さない訳だ。そんな暮らしにくい惑星に帝国の施設なんか造ってもしょうがないからね。」
「ああ、逆に反乱軍にとっては機密事項を隠すのにこれといった場所はない。」
　アウターリムには実に色々な環境の星が存在するものだ。我々の想像の及ぶ範囲の星ならまだマシだ。時には生き物が住んでいるとは考えられない環境で信じられないようなクリーチャーに出くわすこともある。
「マルーン星系はここだ。で、今いるコンコード・ドーンはこっち。まともに飛べば距離にして２万８千パーセクはある。」
「２万８千!?ほぼ銀河の端から端じゃない！」
「まともに飛べばと言っただろう。裏のルートを使えばもっと早く着ける。ただし、違法だ。」

アーボルトは言い終わってからハハッと笑った。
「ああそうだ、君たちは賞金稼ぎだったな。」
愉快そうに笑う余裕綽々な顔は、今までの人生で出会った数え切れない経験を物語っていた。彼自身、法などは虫けらと同等に扱ってきた口だろう。
「ところで、マルーンの反乱軍の基地に何しに行く。」
アーボルトが当然教えてくれるだろうというふうに聞いた。短い沈黙のあとレッドが口を開こうとしたがタロンに先を越された。
「基地をぶっ飛ばしに。」

「キーラ、また行くのか？帰ってきたばっかりだろう。」
キーラが他の3人と船に乗り込んで準備をしようと思ったところで後ろからミッチに呼び止められた。
「大切な仕事なの、すぐに戻ってくるわ。」
「マルーンに飛ぶって聞いたよ。気をつけろ、あそこは危険だ。」
「アウトロー・レッド、出発するぞ！」
船からタロンが呼ぶ声がした。
「もう行かないと。」

「ちゃんと生きて帰って来れるんだろうな。」
「当たり前でしょ、私が死ぬわけない。」
キーラはミッチを安心させるように言うと振り返ることなく船に飛び乗った。

１０歳でマンダロアを出てから戻ったことは一度も無かった。キーラにとってマンダロアは決して良い思い出の残る場所とは言えなかったからだ。それなのに１６歳になった今、偶然にもマンダロアに戻ることになるとは思ってもいなかった。
「マンダロリアンって事は、マンダロア出身なんだろ？」
マンダロアまでの船の中、コックピットにいるタロンを除くサム、ステラト、キーラは後部座席でこれからのことを話していた。初めはこの賞金稼ぎのチームに警戒心を示していたキーラも、同じ女性のサミュエル・テットゥーリや穏やかな性格のステラト・スノウマンと話しているうちに少し心を許したようだった。一緒に働くとなればお互い信頼できるぐらいには馴染んでおかなければならない。
「ええ。でももう私がいた頃とは色々変わっているかも。たぶん、着いても役には立てないわ。」
「それにしても、ジャンって誰なのよ。どうしてアーボルトは詳しく教えてくれなかったの？」

「今レイヴンクローのコンピュータで調べてる。違法の航路を知ってるって事は多分犯罪者だ。見つかるよ、こいつ優秀だから。いや、優秀なのは僕かも。」

先程から船内のコンピューターで調べていたステラトが画面をポンポンと叩いた。

「レイヴンクローって?」

「この船の名前だよ。サムがつけたんだ。」

ジャンを探せ、マルーンまでの道を知っているのは彼ぐらいだ、とアーボルトに言われコンコード・ドーンを飛び立った4人だが、彼がマンダロアにいるということ以外その男についてはなんの手がかりもないままだった。アーボルトが気安く情報を渡すような男でないのは知っている。貴重な情報が自分から漏れたと分かれば自分に危機が迫る場合も少なくないからだ。マルーンに関して情報がほとんど得られなかったため、ジャンに会えなければ一歩も先に進めない。何とかして彼を探し出さなければならなかったが、マンダロアは広い。どこの都市から探せば良いかすら見当もつかなかった。しばらく船内を眺め回していたキーラが何かに気づいたように突然口を開いた。

「私その名前、どこかで聞き覚えあるのよね。」

サムが首をくるっとひねりキーラの方を見た。

「なんでそれを早く言わないのよ!」

「でも思い出せないの、記憶力悪いから。」

「良いから、思い出して。」
「無理なものは無理だってば。」
　キーラとサムが言い争っている間にステラトがついにジャンという名前の人物を見つけたようだ。
「見ろよ、たぶんこいつだ。武器商人かつエンジニア。犯罪者リストに入ってる。」
「いかにも悪そう。」
　ホログラムに映し出された男の顔はぼやけていてよく分からなかったが、顔に傷があるのが見える。
「俺たちほどじゃないだろ。」
　いつの間にか操縦席を離れて後ろにやって来たタロンが他の３人に言った。とりあえず着くまでにジャンの正体が分かって良かった。それにしても帝国の支配下で犯罪者リストに載っている人物となると、かなり危険人物なのだろうか。
「もうすぐハイパースペースを出る。降りる準備をしておけ。」
　タロンが再びコックピットに戻り着陸の準備を始めた。
「あのリーダー気取り。」
　サムが誰にも聞こえないぐらいの声で呟いた。

マンダロア
首都サンダーリ
『こちらステラト。ジャンっぽい人発見。』
ステラトからそう連絡が入ったとき、キーラはマンダロアにあるかつての我が家の前に立っていた。前に立つと扉が自動で開き、キーラを迎え入れた。
中は薄暗く、すべての電源は切られていた。この家にはもう誰も住んでいない。母はキーラがまだここにいた頃に反乱同盟に加わり家を出て行った。父はマンダロアの帝国アカデミーの指導官だったから、たぶん今もそこにいるのだろう。家の中はキーラがここを去ったときとそれほど変わっていなかった。飾り気のない真っ白な壁や天井はまるで以前ホログラムで見た帝国アカデミーの候補生の部屋のようだ。キーラは家の中を直接見ようとヘルメットを脱いだ。
「ハッックション!!ひどい埃!」
顔を上げると目の前の棚にキーラは何かを見つけた。
それは四角い小さな箱のような物だった。表面は金属でできているようでフタはなく、箱と同じ素材のボタンが一つついていた。何かは分からないが初めて見るそれはキーラの興味をそそった。どうせ誰も住んでいないのだから少しぐらい物色したって構わないだろう。希少な物なら売って金になるかもしれない。キーラは見つけたその

箱をズボンのポケットに忍ばせた。
　家を出たのは１０歳の時だが、キーラにそれ以前の記憶はほとんど残っていない。というより覚えておこうと思わなかった。もちろん両親の思い出もほとんど残っていない。キーラが覚えているのは、家を出てから街の外れで密輸業者の船を見つけて・・・
「ジャン!!」
　やっと思い出した!キーラをマンダロアからコンコード・ドーンまで輸送船で乗せて行ってくれた武器商人だ。マンダロアを拠点に武器を売ったり修理したりして回っていると言っていた彼だ。キーラは思い出せたことの自己満足に浸った。その時誰もいるはずのない後から突然声がかかった。
「ジャンならここにいるぞ。」
「え?」
　いるはずのない人の声が突然後ろから聞こえ、驚いて後ろを振り返るとそこにはタロンがいた。
「あれ、タロン・・・?」
「ステラトからの連絡が聞こえなかったのか?彼を見つけたから集合しろと言ったはずだが。」
「ああ、ごめん・・・」

マンダロアに着き手分けしてジャンを探している最中にたまたまかつての自分の家を見つけ、家の中に夢中になってすっかり忘れていた。
「余計な行為は慎め。チームで行動しているんだぞ。」
家の玄関には呆れ果てたサムと待ちくたびれたという表情のステラトが立っていた。
「探したのよ、コムリンクの電源切ってたでしょ。」
キーラのコムリンクはヘルメットに内蔵されているので、ヘルメットを被っているときしか聞こえないのだ。
「本当に、彼がいなきゃ絶対迷ってたよ。」
そう言った2人の後から小柄なおとこが男が顔をのぞかせた。愉快そうに笑うその笑顔は何年も前に見たそれと変わっていない。
「・・・キーラか?」

伝説の賞金稼ぎ　第２章

マンダロア
キリモルトシティ

マンダロアのドーム型シティの中でも一番小さく住むものも少ないキリモルトの町外れにある狭い倉庫には、夕方から夜にかけて人の出入りが多くなる。帝国占領下にあるマンダロアでこのように管理の行き届いていない倉庫はほとんど無いのだが、帝国の警備をくぐり抜け訪れる人のほとんどはならず者で、それぞれが自慢の使い古した武器を持ってくる。だが普段は開け放たれた倉庫のシャッターも今は閉じられ、丁度今、倉庫の目の前の広場に真っ黒のガントレットスターファイターが大きな空気の渦を巻きながら着陸した。

「おい、あの船無許可着陸じゃないのか？」

「ああ、確認してみよう。」

たまたま近くで見ていた警備中のストームトルーパーが２人、ファイターに気づき倉庫の方に向かった。

「さっきのドームとは比べものにならないほど寂れてるわね。ジャンがたまたまサンダーリにいて良かったわ。こんな所探そうとも思わない。」

マンダロアの首都サンダーリでジャンと合流した一行はサンダーリの巨大ドームを離れて首都からは最も遠い小さなドームにレイヴンクローで移動した。ジャンの運転で彼の仕事場である倉庫の前に着陸したレイヴンクローは数少ない周りの住民の目を大いに引いたが、家から出て来て何事かと確認するだけでそれ以上は誰も気にする者はいなかった。

「降りるときは一応周りを確認しろよ。」

ハッチが開きステラト、サム、タロン、レッド、そしてジャンの順に船を降りようとしたその時だった。

「止まれ!動いたら攻撃するぞ!」

「ジャン、中に戻れ!」

ストームトルーパーとタロンの声はほとんど同時だった。先頭のトルーパーに続いて7、8人のトルーパーが船を止めている広場に躍り出た。出かけてトルーパーに気づいたジャンは慌てて船に戻っていく。ジャンは帝国の犯罪者リストに登録されているので見つかったら最後、帝国の狭い牢屋にぶち込まれるのは目に見えている。

「その船は着陸許可を得ていない!直ちに押収する!」

先頭のトルーパーがこちらに向かって叫ぶと、他の者が一斉にブラスターを向けた。
「タロン、何とかして！」
サムが後にいるタロンに小声で囁いたが、すでに完全に船の外に出ているステラト、サム、タロンの３人は幾本ものブラスターを前にして固まるしかなかった。
その時、突然タロンの目の前を何か細い物が猛スピードで掠めた。
「何!?」
バアァァァン!!!
巨大な音を立ててトルーパー達のいる地面がはじけ、４、５人が吹っ飛んだ。お互い何が起きたのか分からず一瞬の沈黙の後、
「撃て！」
トルーパーとタロンが同時に叫んだ。手前にいたサムとステラトがブラスターを撃ちながら慌てて船の陰に退避し、タロンも船のハッチの横でトルーパーに銃を乱射した。
バアァァァン!!!
二度目の爆発があってまたトルーパーが３人倒れた。すかさずサムが残りの２人を打ち倒し辺りはトルーパーの死体を残して何事もなかったように静まりかえった。
「所詮はバケツ頭ね。」

サムが息をつきながらブラスターピストルを腰のホルスターにしまった。ステラトもほっと肩を下ろし扱いにくそうな長いブラスターライフルを船のハッチの近くに置いた。トルーパーは帝国の精鋭部隊というわりに銃は当たらないと言うのは賞金稼ぎの中では広くバケツ頭と呼ばれている。

「でもさっきの爆発は?」

そういえば、とタロン、サム、ステラトの3人が船の方を振り返ると、いつの間にか船の上に上っていたレッドがずるずると滑り降りるのが見えた。

「まさか、その弓で?」

レッドがいつも肩に紐で下げていた折りたたみ式の弓は今は開かれ持ち手の部分の赤いランプが点滅していた。

「弓なんて使うのダソミアの魔女ぐらいだと思ってたけど、なかなかいいわね。」

「あんな神話と私の弓を一緒にしないで。」

騒ぎが収まりレイヴンクローから出て来たジャンを含めた5人はトルーパーの死体を広場の端に寄せると仕事の準備のためジャンの倉庫に入っていった。

「警備は手薄なんじゃなかったのか!」

「お前達の船が目立ちすぎるんだ!あんな真っ黒なガントレット見たらトルーパーじゃ

なくても怪しむだろ！」

怒鳴り声が聞こえ振り向いてみるとタロンとジャンが倉庫の入口で言い争っていた。この倉庫で一晩待ってから出発する予定だったがすぐに連絡を断ったトルーパーの様子を見に首都から増援部隊が送られることを考えると長居はできなくなったので、その事でタロンはかなりいらついていた。しばらくするとタロンは怒って外に出て行き、ジャンはやれやれとキーラの元に向かってきた。

ジャンはキーラが手入れしていた弓を手に取った。武器に詳しいジャンに少し改良してもらおうと先ほど約束しておいたのだ。

「おい、この弓だいぶさび付いてるぞ、いつから使ってるんだ?」

「コンコード・ドーンに来たときからよ。小型の起爆装置を飛ばせるようにしたんだけど重くて使いづらいのよね。」

「じゃあちょっと軽くして威力上げとくか。」

武器商人のジャンはあらゆる武器に精通していて、先程レイヴンクローのレーザー砲の出力を上げ、今はキーラの弓を自在にいじり回し何やら中のコードをいじくっていた。弓を組み立てたキーラ自身にも何をやっているのか分からない。

奥のテーブルではサムとステラトが作戦を練っていた。

「基地の設計が分からないと細かいところまでは決められないわね。爆薬を仕掛ける

か、上からレイヴンクローで爆撃するのは？」
「無理だよ、基地全体を破壊するのにそれだと時間がかかりすぎるし全部破壊する前に反乱軍に撃退されて終わりだ。内側からいかないと。」
「確かに。最も基地が地下だったら一番面倒ね。」
「マルーンの表面は硬い岩に覆われてるからそれは無いと思うよ。それよりどこに着陸するかだ。基地のあるオアシスに到着しないと外に出られないからかなり基地の近くに着陸することになるけど、全く最悪だな。進入する前にバレちゃ元も子もないよ。」
「今までで一番難しい仕事かも。」
　普段どんな困難な任務でも突飛な作戦を強みに成功させてきたステラトとサムも、今回の仕事には頭を抱えていた。マルーンについて詳しいことがほとんど分かっていないのが一番の問題だ。帝国からもほとんど情報が提供されなかったし、そもそもこんな仕事を賞金稼ぎにやらせること自体おかしい。
「今回の仕事、何か裏があるな。」
　ステラトがボーッとそんなことを考えていると突然手に持っていたブルーミルクの入っていたコップが吹っ飛んで、奥の壁にぶつかって割れた。
「うわっ！」
　危うく心臓が止まるところだ。

「どこ狙ってんだ、このバカ者!!」
直後にジャンの怒鳴り声と謝るレッドの声が聞こえてきた。
「ああ、ごめんステラト。まさかこんなに威力があるなんて思わなかったから。コップを撃ち落とすだけのつもりだったのよ。」
「撃ち落とすだけでもダメに決まってるだろ！彼に当たったらどうするつもりだ！」
「バカね、当てるわけないじゃない！」
改良した弓を試しに撃っていたらしい。この距離からコップを撃ち落とした腕は認めるがステラトに当たっていたらと思うとゾッとする。
レッドはよくいる賞金稼ぎとは少し違った。金にはやはり目がないようだが注意深く近づきがたいという感じではなく、まだ若いからかあどけなさが残っていた。いきなり知らない賞金稼ぎをチームに迎え入れて大丈夫かと不安だったが、なんとか上手くやっていけるかもしれないと少なくともステラトとサムはそう考えていた。
「何かあったのか!?」
外でレイヴンクローの調子を見ていたタロンも音に驚いて顔をのぞかせた。
「何でもない、コップを落としちゃっただけよ。」
「あんまりうるさくしないでくれ、船の修理に集中できない。」
そう言うとタロンはまた倉庫の外に戻っていった。

「船の修理なら終わったぞ！」

ジャンが外に向かってそう叫んだがタロンはには聞こえなかったようだ。

タロンがチームのメンバーに出会ったのは一年前だった。依頼者が何人かの賞金稼ぎに同じ仕事を与え、たまたま現場で遭遇したのだ。当時そこにはタロン、サム、ステラトの他にもう一人、コンコード・ドーン出身のゲージという賞金稼ぎがいた。それぞれが自分で仕事をこなすはずだったのに、タロンがヘマやらかしたせいで危うく全員が獲物を取り逃がすところだった。危機的状況に陥ったタロンは死を覚悟したのだが、ゲージに助けられた。目標に一番近づいていたのは彼だったのに、タロンを助けるために獲物を諦めたのだ。次に目標に近かったのはサムだが、状況が一転し目標に近づくのが難しくなった。奇跡的にサムが獲物を捕らえたとき、サムの後ろではステラトが援護していた。仕事を終わらせた後ゲージに聞いた話だが、あの時手を組んでタロンを助けるのが目標を捉えるために一番有効な策だったらしい。４人は報酬を山分けし、その時はそれで終わりのはずだった。

その数日後にゲージから連絡があったときは驚いた。彼の所に入った仕事を一緒にやらないかと言われゲージのもとに向かうと、サムとステラトもそこにいた。ゲージは普通の賞金稼ぎと違いクレジットにはあまり興味がないようで、生計を立てるために

やっているらしかった。賞金稼ぎらしくはないが、戦闘技術は誰よりも優れ頭もよく切れる立派な賞金稼ぎだった。４人がチームを組んだのは全くの偶然だったはずなのにまるで古くからの知り合いのように息が合った。サムは元暗殺者であり潜入はお手のもので、ステラトは作戦を練ることに関して驚くべき才能を持っている。タロンは優れた身体能力の持ち主で、色々なところで傭兵として雇われ厳しい戦地をくぐり抜けてきた。４人がそれぞれの能力を用いることでチームでより大きな仕事に挑むことができる。クレジットのことしか頭になかったタロンやサム、ステラトも仲間を持って少し変わった。

しかしそんな日も長くは続かなかった。出会って1年ほどたったある日の仕事でゲージが反乱軍に殺されたのだ。ステラトの立てた作戦は完璧だったし誰かがミスをしたわけではなく、ゲージ自身が無茶をしすぎたのだろう。

リーダーとも言える存在だった彼を失ってからタロンのチームは変わった。タロンは自分の殻に閉じこもるようになったし、サムやステラトは前ほど協力的ではなくなった。ゲージの代わりに今はタロンがチームを率いているが２人はそれほどタロンを信頼していないようだった。もちろん仕事のたびに2人は得意分野を生かしていい働きをしているが、仕事が終わると皆チームに留まることはなく銀河のあちこちに散っていった。

そんな状況の中レッドに出会った。彼女をチームに引き入れれば少しはマシになるだろうと思ったが、正直期待外れだ。マンダロリアンの賞金稼ぎなら皆腕利きだと思っていたが、彼女は出会って以来ドジばかりやってとてもチームでまともに仕事がこなせそうには見えなかった。状況は悪くなる一方だ。タロンは操縦席に座り込み、薄暗い静かな外を眺めながら一人物思いに耽っていた。

「タロンは多分、ゲージが死んだのは自分が彼を助けられなかったからだと思って自分を責めてるのよ。あの時ゲージと一緒にいたのはタロンだから。」

サムとステラトからチームの過去を知らされ、キーラとジャンは壁に寄りかかって沈黙した。出発は明け方にしようと言うことになり、タロン以外の4人は作戦を練りながら出会って間もない自分たちの話に花を咲かせていた。初めて会ったときから微妙に息の合っていないと思っていたが、どうやら訳ありのようだ。

「時々ああやって一人になりたがるのよ、特に大きな仕事の前はね。仕方がないとは思うんだけど、いい加減立ち直ってもらわないと。」

倉庫の中から顔を出してコックピットのタロンの様子を見ていたサムがため息をついた。

窓に目をやるとちょうど真上に来たマンダロアの衛星コンコーディアが青白く光っているのが、ドーム型都市の透明な天井から見えた。砂漠気候のマンダロアとは正反対の青々とした温暖なコンコーディアにタロンは昔一度だけ行ったことがあった。まだチームで活動する前、デスウォッチの残党で今は賞金稼ぎのマンダロリアンに会いに行ったのだ。そのマンダロリアンは冷徹で、今までに殺してきた人の数は数え切れないと言っていた。

レッドもあの時の賞金稼のように強く残忍ならどんなに信頼していたことか。きっとサムとステラトも同じ事を考えているに違いない。ましてやゲージの代わりなんて、彼女につとまるはずがない。

「なあゲージ、どうすればいい？」

タロンはコンコーディアに向かってつぶやいた。周り一体ドームの壁におおわれたここでは、声を上げても届くことはなかった。俺が独り言なんてな。そう自分に苦笑しながらタロンはレイヴンクローを出て皆のいる倉庫に戻っていった。

伝説の賞金稼ぎ　第3章

「よし、もう一回作戦について確認しよう。」
レイヴンクローに乗り込みマンダロアを出た5人はステラトが必死に考えた作戦に耳を傾けた。
「基地内に進入したらまず僕とサムで反乱軍のファイターと船全部に起爆装置をつけるからその間にタロンとレッドは管理室にいって外部との通信装置をぶっ壊せ。それまでは絶対僕たちの存在に気付かれちゃダメだ。それが完了したらこのジャンが作ってくれたオモチャで敵を基地の外におびき寄せ、そのタイミングでファイターの起爆装置を起動する。僕らが外で一暴れしている間に二人は中に残っている反乱者たちをできるだけ始末するんだ。最後に敵の数が減ったらジャンが空からレイヴンクローで爆撃する。」
ステラトが話しながら指さしたのはジャンが今回の仕事のために開発してくれたユニークな武器だった。見た目は巨大なブラスターのような物だが、銃口が大きくふたがついていた。
「すごい、これを一晩で?」

サムが武器を手にとって眺めながら言うとジャンはまあな、と得意げな顔であごを撫でた。たったの５人で反乱軍の基地を一つ吹き飛ばすと言うことになると一つでも間違えれば作戦失敗だ。おまけにマルーン基地には反乱軍の司令官の中でも特に戦闘力に長け、クローン戦争を生き延び今まで反乱軍の機密情報を守り続けてきたというミフ・アボットがいるのだ。

「作戦変更だ。」

黙って聞いていたタロンが突然口を開いたので皆が一斉にタロンを見た。

「何？」

「レッドはお前達が連れて行け。俺は一人で大丈夫だ。」

「バカ言うなよ、反乱者たちのど真ん中だぞ、一人じゃ何かあったら太刀打ちできない。」

「俺はそんなヘマはしない。」

タロンの説得力のない話にいらつきながらサムが口調を強めた。

「いい加減にしてよ！自分の事情で勝手に作戦を変えないで。」

「自分の事情だと？お前達も信用していないから俺に押しつけたんだろ。」

タロンは噛みつくように声を張り上げた。

「信用してないって？」

ステラトが静かに聞き返した。船の中に重たい空気が張りつめ、遠目に見ていたジャ

ンがやれやれ、と呆れながら近くの椅子にどっかりと腰掛けた。
「こいつに決まってるだろ。」
タロンが投げやりにキーラを指さして言った。キーラは信頼されていないことは分かっているのか強がっているのか、何事もないような顔をしている。
「それどういうことよ。」
見かねたサムとステラトが口々にタロンに言った。
「さっきトルーパーが現れたときに僕らを助けてくれたじゃないか！僕たちは彼女を信頼してる。それに今は彼女の協力が必要だ。」
しかしタロンは納得しなかった。
「いいか、俺はお前達より長年賞金稼ぎをやってるんだぞ。経験もここにいる誰よりもある。信じられる奴ぐらい判断できる。ゲージの二の舞にはなりたくないしお前達をそんな目に合わせられない。何が最善だかは俺が判断する。お前達は俺に従っていればいいんだ、俺はこのチームのリーダーなんだぞ！」
タロンが一気にまくし立てたので周りにいた４人は唖然とタロンを見つめた。タロンのめちゃくちゃな発言に誰もが言葉を失った。
「すまない・・・」
しばらくしてタロンが我に返ったように呟いた。そしてクソッと投げやりに手に

持っていたブラスターピストルを船の床に投げつけた。
「自分を責めて何になるの？」
　サムがタロンの方を向いて言った。
「そうだよ。過去にしがみついてないで前に進まないと。」
　タロンと長い間共に過ごしてきたサムとステラトはもちろん彼の苦しみを共有してきた。しかし彼が立ち直らない以上２人が何を言っても同じだった。チームで動いている以上仲間を信頼できなければ一緒にいる意味が無いのだが、サムもステラトもタロンにリーダーを任せて大丈夫かどうか疑っていた。その時２人を代弁するようにキーラが口を開いた。
「こんなに気遣ってくれる仲間がいるのにそれに応えないと。私なんて、今までで誰かを信じられたことは一度もない。」
　その言葉はタロンだけでなくサムやステラト、そしてキーラ自信にも向けられたように感じた。
「信じてもらえたことも。」
　キーラの言葉にサムやステラトは目を丸くした。いつも明るく冗談ばかり言っているキーラにも暗い過去があることを彼らは知らない。
「でも今は違うと思う。少なくとも、サムとステラトのことは信頼してる。それにタロ

ンも。」
「おい！」
　コックピットに座って一人だけ名前を呼ばれなかったジャンが怒鳴った。
「ジャンもよ。忘れてた。」
「忘れてたは余計だ！」
「本当に、根っからのドジだな。」
　キーラとジャンのやりとりに暗い顔をしていたタロンがようやく笑った。
「すまなかった、最近上手くいかないことが続いて・・・全く信頼出来ないわけじゃない。ただ、俺はまだお前が何か隠してるようで気にかかるんだ。」
「別に。何も隠してない。」
　キーラはタロンにそう言われると、ほんの少しだが目をそらして言った。
「嘘をつくのが下手だな。」
　タロンが探るような目でキーラを見ると、キーラはしばらく黙っていたがとうとう開き直ることにしたらしい。
「隠してるのはお互い様でしょ。」
「まあいい、作戦に支障が出るような事じゃなければ。」
　タロンとキーラの目が一瞬合った気がした。お互い探り合うように目をぎらつかせ

ていたが何を考えているのかは分からなかった。ひと段落ついてジャンが椅子から立ち上がりコックピットに向かいながら肩越しに言った。
「似合わないことを言うようだが、今回の作戦はお互い信頼出来るかどうかにかかってるんだぞ。くだらないことで張り合うのはよせ。」
「そうよ、似合わないわ。」
「そこじゃないだろ！」
　キーラは口を開くたびにトンチンカンなことを言ったが、今はそれでも周りの空気を和ませるのに丁度良かった。
「ハイパースペースに入るぞ。いいか、違法航路を通るんだから後戻りは出来ない。っていうかしない。」
　操縦席に座るジャンがそう言うのを合図にタロンも副操縦士席についた。
「よし、出発だ。」

　突然船全体がグラリと揺れた。目の前に巨大なマスシャドウが広がり機械がミシミシ音を立てる。このままだと陰に吸い込まれる！そう思った瞬間船がハイパースペースを飛び出した。
「ジャン！前！前！」

「見えていないとでも思ってるのか！」
　ハイパースペースを出た先は巨大な惑星の目と鼻の先だった。ハイパースペースに質量の陰を落としていた惑星だ。1秒でもハイパースペースを出るのが遅かったらあのまま惑星を突き抜けてこの船は木っ端みじんになっていたはずだ。ジャンがレバーを一気に引き船体が急上昇する。
「「うわあああ！」」
　コックピットの後ろの部屋に座っていたキーラ、サム、ステラトの3人は反動で後に飛ばされ鈍い音を立てて壁にぶつかった。
「さっきは小惑星帯で今度は惑星に突っ込む気か！」
「黙ってろ！」
　ジャンは必死にハンドルを握り惑星の軌道から外れようと歯を食いしばっていた。この状態で惑星の引力に捕まれば間違いなく墜落する。エンジンを全開にして船は徐々に惑星から遠ざかっていった。
「開拓されてないハイパースペース航路を使うなんて聞いてないぞ。」
　タロンは一息ついたジャンをすかさず問い詰めた。
「マンダロアからマルーンまで一直線に行く航路なんだ。途中惑星や小惑星帯にぶつかるのは仕方ない。」

マンダロアを出発してからというもの、途中で航路を遮る惑星や小惑星帯に出会うたびにハイパースペースを飛び出し目の前の物体にぶつかりそうになるのをスレスレで避けることの繰り返しだ。おかげで後ろのキーラたち３人は床を転がり回って何度も頭を打ち付けていた。
「どんなに危険か分かってるのか？」
「俺は前にもここを通ったことがあるから大丈夫だ。でなけりゃ俺は今まで生きてない。」
ジャンは余裕ぶってそう言ったが額から汗が流れていた。
「ちょっと、後どれぐらいで着くのよ。」
折り重なって床に倒れ込んでいた後ろの３人は一刻も早くマルーンにたどり着いて欲しいと祈るばかりだった。
「次のハイパースペースを出ればマルーンだ。」
「もうこんな目に合わずにすむんだね。」
「ああ、帰りもこのスリリングな体験をしたくなきゃな。」

「ベイダー卿、マルーンまでの違法航路に２機の船を感知しました。例の賞金稼ぎの船だと思われますが一応確認しますか。」

「行かしておけ。あの航路をくぐり抜けるのは今回のミッションの条件だ。生きて出てこられない者に用はない。」

マルーン
反乱軍機密情報基地

「着いたぞ、マルーンだ。」

最後のハイパースペースを飛び出して目の前に現れたのは、太陽に照らされてギラギラと黒光りする小さな惑星だった。決して美しいとは言い難いが今まで見たどんな星とも違う異様な雰囲気を放っていた。

船はマルーンの軌道に乗りそのまま大気圏内に突入した。見渡す限り岩が巨大な山と谷を造って連なっている。真っ黒なレイヴンクローの機体は岩の上を進んでもあまり目立たず好都合だ。

「こんな惑星に基地を置いたなんて信じられないな。」

強いて言えば見た目はイードゥーと似ているだろうか。しかし大きく違う点は、イードゥーは年中雨が降っているのに対しここは乾燥している。黒い岩がそのまま太陽の熱を吸収しレイヴンクローの温度センサーは８００度を超えていた。

「オアシスがあるならおそらく深い谷の間だ。谷に沿って飛ぼう。」

ジャンはゆっくり船体を下げて、谷のすぐ上を飛んだ。下をのぞき込めば遠くに谷の底が見える。水が流れているなどということはもちろんないが、谷の底は陰になっており所々太陽の光が届いていて地上のように表面が８００度になるということはなさそうだ。この漆黒の星に唯一存在するオアシスがあんなに暗いのではここに生息しようと思っても1ヶ月もしないうちに気が触れてしまうだろう。

「ステラト、生命体反応をスキャンしろ。」

「了解。」

レイヴンクローの優秀な生命体スキャナーは半径１００キロ以内のどんなに小さい生命体でも感知することが出来た。サムとステラトが何日もかけて改良したものだ。

「もしかしたらクリーチャーを探知するかもしれない。」

昔からクリーチャーを見るのが好きだったステラトが少し楽しそうに言った。もちろん獰猛でないやつに限るが。

「クリーチャー？いるわけ無い。」

「宇宙空間をハイパージャンプ出切るクリーチャーもいるんだから、マルーンにいても何も不思議じゃないよ。」

テーブルについたコンピューターが辺りの地図をホログラムで映し出しセンサーが自分たちの位置を赤い点で示した。サム、ステラト、キーラの３人が身を乗り出してホ

ログラムをのぞき込む。
「ん？」
数秒後、センサーが何かを感知した。船の進行方向１０キロ程の位置にいくつもの赤い点が映し出される。
「どういうこと？」
サムは不思議に思いホログラムを拡大したり回してみたりしてみたが赤い点は明らかに自分たちに近づいている。１０キロということは目の前に伸びる谷の先にそろそろ見えるはずだが、依然として真っ黒な岩場が広がるばかりだ。
「タロン！前に何か見えない？センサーが進行方向１０キロ以内に生命体反応を感知したんだ！」
「何だって!?おい、ジャン止まれ！船を後退させろ！」
「待て待て、基地なんてないぞ？自分の目で確かめろ。」
ジャンはそう言いつつ突然レバーをガチャンと引いて急ブレーキをかけたので皆は一斉に前につんのめった。その拍子にコックピットに突っ込んだキーラが顔を上げると、確かに目の前は黒い岩が続く退屈な景色だったのだが、
「ねえあそこ、なんか不自然じゃない？」
キーラが何かに気付き窓の外をまっすぐ指さした先を見ると、確かに言われてみれば

という感じだが谷の底の岩が一部人工的に削られて平らになっているようだ。
「絶対にあそこよ。もしかしたら予想に反して基地は地下に埋まっているのかも。」
　確かに、あれが基地の入り口だとしたら、船などが到着する時のために平らにしてあるのだろう。ジャンが船をゆっくりと谷の底に沈め、生命体反応のある場所から十分距離をとった位置に着陸させた。谷の底に行くにつれてレイヴンクローの温度計に表示はぐんぐん下がり地上では８００度あった気温もすでに０度近くまで下がっている。太陽の光が当たっているのはほんの一部だった。
「行って確かめないと。」
「その必要は無い。こいつを使え。」
　そう言ってジャンがパンパンに膨れた腰のポーチから取り出したのは見慣れない小さな黒い塊だった。最初はそれが何なのか分からなかったが、近づいて見てみるとその正体に気付き皆目を丸くした。
「何これ、こんな技術どこで手に入れたの!?」
　サムが驚いて言った。それは超小型のプローブドロイドだった。ジャンの手の平にすっぽり収まるサイズだ。最新の技術を誇る帝国のドロイドでもここまで小さくはないはずだ。
「高性能の赤外線熱探知機付きで名前は〝太っちょ〟だ。」

「〝太っちょ〟？」
なぜ〝太っちょ〟というのかは謎だが、名前には全く似合わない見た目は完全に黒い石ころでマルーンの風景に完璧に同化する。岩にこれが張り付いていても反乱軍は目にも止めないに違いない。
「帝国にこの技術を売れば一生稼がなくてもやっていけるわよ。」
「帝国に売るつもりはねえ。これを使えば俺は何だって出来るからな。」
ジャンは大事そうに〝太っちょ〟を撫でるとステラトに持たせた。
「これがコントローラーだ。」
そう言って小さなコンピューターをレイヴンクローのコンピューターにつなぐと、画面に何やら細かい文字や記号がたくさん映し出された。もちろんジャン以外は解読不能だ。
「よし、早速ドロイドを偵察にいかせろ。」
「〝太っちょ〟だ！」
ステラトが小さいハッチを開けて〝太っちょ〟を外に送り出した。同時にジャンが手元のコントローラー兼通信機のスイッチを入れると〝太っちょ〟は小さい羽を高速で回転させて浮き上がり岩の開けた場所に向かって進んだ。
「羽で動くのね。」

皆は〝太っちょ〟の行方見守りながら深刻な顔で偵察の結果を待った。地下に基地があるとなると最終的にレイヴンクローで基地を爆撃するという手は使えない。〝太っちょ〟はゆらゆらと飛びいつの間にかレイヴンクローから大分遠ざかって黒い点が見えるだけとなった。

ガツンッ

皆で頭を抱えて新たな作戦について話し合っていると〝太っちょ〟が突然何かにぶつかったような音を立てて止まり、送られてきている映像がグラリと揺れた。

「何？」

カメラには何も映っていない。しかしどんなにコントローラーで〝太っちょ〟を前に進めようとしても空間の中にピタリと止まったままだった。

「こんな時に壊れるなんて！ボロすぎよ！」

気の短いキーラが悪態をついた。

「壊れたわけじゃねえ、前に何かがあって進めないんだよ。」

「ジャンまで壊れちゃったわけ？」

キーラは腰掛けていた椅子から立ち上がりコックピットの窓から外の様子を伺った。もはや〝太っちょ〟がどこにいるのかはこの距離だと全く分からないが、遠くに見える開けた場所には確かに何も存在しなかった。

「とりあえず熱探知機に切り替えてみよう。地下の様子が分かるかも知れない。」
〝太っちょ〟のカメラが熱探知に切り替わり発信されている映像が一変した。青白いホログラムが消え、代わりに温度の低いところは青、高いところは赤い色で示される新たなホログラム映像をテーブルの上に置いた通信機が映した。開けた場所をルーズでとらえたカメラには5度前後しかない谷底の真っ青な映像の中に赤々と熱を帯びて巨大な建造物が映し出されたのだ。
「何だこれは・・・」
今まで見えていなかった何もかもがホログラムに映し出される。何もない空間にあったのは、彼らの予想を超えた反乱軍の技術だった。
「ステルス船だ・・・」
ステラトが感心して言った。〝太っちょ〟の行方を塞いでいた反乱軍基地は、全体が巨大なステルス船だったのだ。

「#&＊＊＊!&@＊;〜※」
「ああ、解除しないとな。」
「@!&@＊:＊:。&#&☆S☒☒」
「何?そんなはずは無い。もう一度確認してこい!マルーンに俺たち以外の船が来てる

はずがねえ。」

伝説の賞金稼ぎ　第４章

キーラに言わせてみれば普通の基地だろうがステルス船だろうが別に何の価値もなかった。潰して金が手に入るのならそれで十分だ。しかしサムやステラトはそうは思っていないようだ。

「ステルス船はクローン戦争時代に共和国が開発したんだ。試作品の段階で１機だけテストしたって記録は見たことあるけど、これは多分そのステルス技術を応用してるんだろうな。ステルス装置を稼働したまま船からの攻撃は出来ないはずだけど、その時代からどれだけ技術が発達しているかどうか・・・少なくとも何かあれば基地ごと他の惑星に移動できる訳だから、ここの機密情報がずっと守られてきたのも納得がいく。」

ステラトは初めて見たステルス船にすっかり興奮してまくし立てた。〝太っちょ〟が基地全体の様子をスキャンし終えその映像を元に作戦を練り直しているところだった。ステラトとサムは興味津々にホログラムを眺め回して、巨大なコルベットのステルス船の技術をどうにかしてこのレイヴンクローに用いたいとでも考えているのだろうか。

「でもこのステルス装置をずっと稼働しているとなると相当なエネルギーが必要ね。た

ぶんマルーンの地表に線を引いて岩が吸収する熱をエネルギーに変換して――――」

サムの分析を呆れたキーラが途中で遮った。

「どうでもいいけど、作戦はあれでいいの？」

「ああ、完璧さ。」

「それじゃあ、早いとこ片づけるとするか。」

タロンの合図で５人はそれぞれの武器や持ち物の装備を始めた。キーラは矢を揃えブラスターピストルと一緒にクイーバーに収めるとベルトを腰に巻き付けた。万が一の時にジャンが皆に配ったサーマルデトネーターをズボンのポケットに入れようとしたとき、ポケットにすでに入っていた何かにカツンと当たった。何かと思いポケットの中身を引っ張り出してみるとそれはマンダロアの我が家で拾った謎の金属の箱だった。

「レッド、それは？」

運悪くサムが気づいて尋ねたが、キーラはなんでもないと言ってごまかしデトネーターと一緒に再びポケットにしまった。最後に弓を背負ってヘルメットを被ったら準備完了だ。サムはブラスターピストル２丁と軽装備で、ステラトは長いライフル銃にジャンの巨大なブラスターを担いでいる。タロンは重たそうなジャケットを着て愛用のブラスターを手にしていた。〝太っちょ〟から映像が送られてくる小さなコンピューターもジャケットに収めた。

「いいか、何があっても作戦続行だ。たとえ誰かが殺されてもだ。」
「縁起でもないこと言わないで。」
「コムリンクは絶対に切らないこと。状況は常に船に待機しているジャンに知らせろ。爆破のタイミングが俺が指示する。」
「了解。」
タロンが皆に最終の指示を出し、ジャンが船のハッチを開けた。
「それじゃ、あとはよろしく頼む。」
タロン、キーラ、サム、ステラトの順にマルーンの地表に降り立つと、後ろでハッチがガチャンと閉まる音が聞こえた。
「寒いわね。」
一番薄着のサムが腕組みをしながら呟いた。タロンの持っている温度センサーは氷点下5度を指していた。生物が生息できる環境ではあるが、クリーチャーは見当たらなかった。
4人は狭い谷底を縦に並んで進んだ。足元は非常に悪いが崖っぷちでないだけマシだ。基地のある平地に出たら〝太っちょ〟が確認した警備システムを潜り抜けて船に潜入しなければならない。機密情報の集まる基地と言うだけあって警備は厳重だった。幸いなのは船の外に設置されている警備システムにはステルス装置が適応されていな

いことだった。
「よし、ここで待とう。」
基地のすぐ近くまで来た左右の切り立った崖が少し出っ張っている所で一行はいったん進むのをやめ、しゃがんで陰に身を潜めた。ステラトがコンピューターから〝太っちょ〟をコントロールして基地の入り口付近の岩に止めた。
「よし、準備が出来たよ。」
「普通に行けよ。」
タロンがサムに向けて言った。
「やっぱりこういう役はレッドが向いてると思わない？」
「マンダロリアンアーマーなんか着てたらいかにも賞金稼ぎって感じで怪しまれる。上手く侵入できるかにかかってるんだ。頼む。」
「分かったわよ。」
サムはしぶしぶ認めると立ち上がってブラスターピストルを１丁ステラトに預け、変わりに短い金属の棒のような物をホルスターに入れた。
「上手くいったらすぐに侵入するから連絡を待て。」
「了解。」
そう言うとサムは岩の陰から出て谷を堂々と歩いて行った。残った３人は岩陰から

少しだけ身を乗り出して基地の方の様子を観察した。
「上手くいくかな。」
「サムならやってくれるさ。」
明らかに楽しんでいるキーラとステラトをよそにタロンは難しい顔でサムの後ろ姿を見送った。
基地のある平地に入ったサムはそのままゆっくり歩き続けた。そろそろ船があるはずだ。恐らく基地の中では監視カメラに移ったサムを見て一部の反乱軍が騒ぎ出している頃だろうか。基地があるとは分かっていたがここで歩く速度を緩めては怪しまれる。サムは何も知らない振りをして歩いた。ステルス船でもこれほどまでに完璧に透明化させているのは見事だった。中では人が右往左往してるはずなのに音も全く聞こえない。
しかしまた数メートル進んだところでサムは変化を感じ取った。氷点下しかないはずの周囲の温度が少し暖かくなった。もうすぐそこだ。そう思い次の一歩を出した途端、
ガツンッ
サムは突然ステルス船のカーブを描いた側面に派手に頭を打ち付けてその場にバタリと倒れてしまった。

　ステルス船の基地の中の一室ではちょっとした騒ぎが起こっていた。本部のすぐ横にあり、船の内部と外部の警備システムを一斉に管理してる警備室だ。普段そこには４、５人の反乱軍の職員が交代で入り２４時間基地の安全を見守っていた。今日もこの時間帯のいつものメンバーが平和で退屈なモニターの観察をしながら談笑していたところだった。
「おい！ぶつかったぞ！」
「救急隊員を送るべきじゃないのか？脳振盪をおこしていたら危険だ。」
「とりあえず本部に連絡しよう。」
　１０分ほど前に基地のある平地に突然女がひとりで紛れ込んできたのだ。彼女はステルス船に気付かないまま歩き続け船にぶつかって倒れたままの状態になっていた。
「こちら警備室。基地の外で人が1人基地にぶつかって倒れています。救急隊員の派遣を要請します。」
「了解。すぐに送ろう。」
　本部から最高司令官の声が帰ってきた。
「ありがとうございます。アボット司令官。」

「痛そう！」
「サムなら平気だよ、石頭だから。」
「じゃあ船の方が心配ね。」
まだ笑いが治まらないキーラとステラトがヒイヒイ言いながらも反乱軍の救急隊員を外に呼び寄せたことに喜びの声を上げていた。
「お前ら、サムにバレたら殺されるぞ！」
そう言いながら2人のことを睨むタロンも顔が少し引きつっている。ステルス船にぶつかって倒れ怪我人を装うのはもちろん作戦のうちだった。サムが本当にぶつかったのでなければ、気絶した振りをしながらこのまま基地内に潜りこめる訳だ。
「やっぱり適任だったな。」
タロンは〝太っちょ〟の映像を入り口に拡大し、担架に乗せられたサムが運ばれてくるのを確認した。
「静かにしろ。もうすぐだ。」
タロンは顔を画面にくっつけるようにして様子を観察している。キーラとステラトも話すのをやめサムのコムリンクから入ってくるかすかな音に集中した。
『マルーンに人が来たのなんていつぶりだろうな。』
『半年ぶりぐらいだろ。確か前の時も燃料不足の不時着だった。この人もきっとそうだ

ろう。』

『可哀想に、たった一人でこんな所に迷い込んで。後で船を捜索するべきだろうな。』

『さっき司令官から指示があった。医務室に運んだら行くぞ。』

２人がかりで担架を運んでいる上でサムが微かに動いた。ちょうど担架が入り口を通り過ぎようとしたその時、サムの腰のホルスターから先程の金属の棒のような物が落ちて入り口の扉のそばに転がった。反乱軍の２人は話すのに夢中で気付いていない。

「出る準備をしとけ。」

タロンはキーラとステラトに指示すると、〝太っちょ〟の映像で彼らが基地内に完全に入ったのを確認しコンピューターの画面を切り替えて何かのスイッチを起動させた。

救急隊員の後ろで先程の金属の棒が自動的に動き出した。それは入り口のドアが閉まるのを感知して動き出し、ドアに張り付くとパタパタと広がり始め扉と壁の間に挟まると扉が完全に閉まるのを止めた。反乱軍が気付く様子はなく、扉は数センチの隙間を残して開いたままになっている。

「今だ、走れ!!」

タロンの合図と同時に、３人はキーラを先頭に把握している監視システムの位置を避けながら入り口に向かって全速力で走った。ドアストッパーの効果は一時的で、ドアが開きっぱなしになって警報が鳴るのを防ぐが、一度閉じてしまったら二度とチャンスを

失う。ゴツゴツした岩の上を半ば飛び跳ねるようにして走ると、一番先にたどり着いたキーラが自動ドアを押し開けて3人は折り重なるようにして中に入った。金属の棒は元の形に戻ると基地の外に転がっていった。

「第一関門突破ね。」

息をつきながら回りを見渡すと、入り口は狭い通路に繋がっていて幸いなことに人はいない。基地とは言っても所詮はコルベットそのものだ。他の基地ほど広くはないはずだ。

「ジャン、基地に侵入した。そろそろ反乱軍の捜索が来るはずだから船を移動させといてくれ。」

『了解。』

タロンがコムリンクからジャンに知らせると、ジャンはずっと連絡を待っていたらしく瞬時に返事が返ってきた。

「誰かが来ないうちに移動しないと。」

3人はブラスターを構えると薄暗い通路を静かに歩き始めた。

タロンたちが侵入して10分も経たないうちに突然船内の警報が鳴った。入り口から通路を真っ直ぐ進み脱出ポットの扉の前に身を潜めていたタロン、キーラ、ステラト

の三人のコムリンクにサムの声が入ってきたのとほぼ同時だった。
『気付かれた。発着所は基地の入り口の通路を真っ直ぐ進んだ突き当たりよ。今格納庫の裏に隠れてるから早くして。』
　何とかして船のシールド発生装置とステルス装置を破壊しなければならないが、船内を堂々と動き回るわけにも行かず、反応炉にたどり着く前にサムが逃げ出したことが反乱軍にバレてしまったようだ。きっと監視役を殴り倒して脱走してもしたのだろう。船内が騒がしくなり始め、３人が隠れている通路にも反乱軍の武装したフリートトルーパーが捜索に出て来ている。
「それじゃあ僕はサムと合流するよ。」
　そう言ってステラトは素早く立ち上がると陰から少し顔をのぞかせ様子を確認した。作戦通りステラトがサムと合流できれば次の段階に進める。
「敵はまだ俺たち3人の事には気付いていない。驚かしてやれ。」
　タロンがそう言うと、ステラトは2人にニヤッと笑うとブラスターを担ぎ直して通路を走って行った。通路で警戒していたトルーパーがステラトに打たれてバタリと倒れる音がする。そろそろここにいれば見つかる頃だ。
「さて、俺たちも行くか。」
　タロンがゆっくり腰を上げたのでキーラもつられて立ち上がった。ヘルメット越し

に眉間にしわを寄せたタロンが見える。最も、普段から難しい顔をしているので特別と言うことはないが。

　このステルス船はコルベット型だがスターデストロイヤーに近い大きさがありおまけに道も分からない。恐らく二人が目標とする反応炉にたどり着くには時間がかかるだろう。今までに無い大きな敵を相手に、すべては作戦通りに動けるかにかかっていた。キーラは肩に折りたたまれて下げていた弓を手に取った。ジャンに改良してもらったよく手に馴染んでいる弓はワンタッチで勢いよくバコンと音を立てて開くと真っ直ぐに弦が張った。今までこの弓を手放したことはない。毎晩一緒に寝ているぐらい、キーラにとっては大切であり、最も信頼できる。命そのものだ。弦がきちんとはまっていることを確認してキーラはタロンの方を向き直った。

「準備完了。」

　そう言った瞬間、突然白い壁の後ろから人影が飛び出した。

「お前達、そこで何をしている!」

　反乱軍のフリートトルーパーがブラスターをこちらに向けて立っている。まずい、見つかった!すぐに撃たれなかっただけマシだ。キーラは瞬時に腰の筒から矢を抜き弓を構えたが、

　バンッ

キーラの腰の辺りの横をすり抜ける光線と共にトルーパーがバタリと倒れ、見るとタロンはブラスターを格好つけて指でクルッと回しホルスターに戻していた。タロンの方が一歩先だったようだ。キーラは今まで見たことのないタロンの俊敏さと生き生きとした顔に目をまるくした。

「すぐに殺さないから殺されるんだ。」

タロンは倒れた反乱軍兵士を見下ろすと、彼が手に持っていたコムリンクをもぎ取ってポケットにしまった。

「不審者を発見してもブラスターを撃たないなんていったいどんな教育を受けてるんだろうな。これでしばらく反乱軍の動きが分かる。今のうちに反応路にたどり着こう。」

そう言ってタロンは軽い足取りで廊下に飛び出すと、キーラに着いてくるよう手で合図した。キーラは回りを警戒しながらも置いて行かれないように小走りでタロンがについて行った。

マルーン基地の本部には基地内の幹部とそれぞれの中隊のリーダーが中央のホログラムテーブルを囲んで集まっていた。最高司令官のミフ・アボットがホログラムで映し出された基地内全体の地図に所々表れている赤い点を目で追った。警備に出ている隊員が持っている発信機だ。普段は静かなのに、今は慌ただしく動いて集まった者は皆目

をちらつかせた。
「何者かが基地に侵入した。と言うより我々から迎え入れてしまった。現在船内を警備隊が捜索中だが未だ詳しいことは分かっていないようだ。」
ミフが話し出した。すでに知っている者もいたが、初めて聞く人がざわざわと隣の人と話し始めた中、質問の手が上がった。
「たった一人で侵入を試みたのでしょうか？」
「今のところ医務室に運ばれた彼女以外の目撃情報は入っていない。入り口の扉はすぐ閉まる仕組みになっているし、我々が登録している手形認証がないと内からも外からも開けられないからな。知っての通り――」
突然流れるように話していたミフが口を閉じ、本部の入り口の方に顔を向けた。そのとたん、一人の警備隊がドタドタと駆け込んできた。
「司令官！」
みんなが一斉に入り口の方を見た。警備隊は走ってきたせいかかなり息が上がっていて、途切れ途切れに話だした。
「警備隊が3人やられました、ブラスターで撃たれています。」
「ブラスターで？」
誰かが皆に聞こえるぐらいの声で呟いた。

「司令官、女はブラスターを持っていませんでした。」
　医務室で彼女の持ち物を検査した医療チームのリーダーが発言した。
「つまり、彼女が我々のブラスターを奪って攻撃したか、他に侵入者がいるということになる。」
「ええ。しかし艦内では我々はブラスターをスタンモードにしてあります。後者の可能性が大きいかと。」
「なんだと?不可能だ、一体どうやって・・・」
「ドアは女を運び入れたときの一回しか開いていない。それでも艦内に人が侵入したと?」
「一体何を狙ってここへやってきたんだ?やはり情報か?」
　集まったメンバーが一斉に騒ぎ出し、口々に言い合った。ミフは手を振って皆を黙らせると、鋭い口調で警備隊に指示を出した。
「捜索を徹底させろ。ブラスターのスタンモードを解除、目標を見つけ次第、致命的を与えない程度に動きを封じろ。ここへ来た目的を聞き出す。」
「了解しました。」
　そういうと警備隊は来た道を走り去っていった。
「手強い相手だな。」

司令官が厳しい表情で、しかしどこか面白がっているような口調で呟いた。

伝説の賞金稼ぎ　第５章

廊下を進んだ先は、開けた場所に今来た所を含めて４つの通路につながっていた。縦に長いコルベットの構造を考えると反応炉は船尾の方にあるのが普通だが、サムによると船尾にはドッキングベイもあるはずだった。しかしこれだけ大きな船を動かすのにエンジンの近くに反応炉があったほうが効率的だ。

「じゃあ私が左。タロンは右ね。」

後から着いてきたキーラが４つの通路を見て言った。

「俺は目の前の道が正解だと思うけどな。」

その時だった。微かな音と振動が静かになっていた船内に響いた。正面の道の方から複数の人の足音が聞こえ、走ってこっちへ向かっている。時間がない！

「後で合流だ！」

タロンがそう言い終わるのを待たずに二人は左右の通路に飛び込んだ。

船尾のドッキングベイにたどり着いたステラトはずらりと並ぶＸウィングや貨物船の影に隠れながらすでにどこかで作戦の準備をしているはずのサムを探した。ドッキ

ングベイには船の整備をしている人や警備の人以外は誰もいない。警備も手薄で船の間を縫って歩くのはたやすかった。

今まで出会った人の数から考えるとこの基地はかなり小規模だ。機密情報を扱うから出入りする人の数は最小限に抑えているのだろうが、これなら基地を潰すのは思ったより大変ではなさそうだ。とは言えこの基地に５０人いたとしてもこっちは5人だ。多勢に無勢なことは変わりないが。タロンたちが船を無効化してくれるまではこちらはかなり不利な状況にある。我々が中にいる状態で船が離陸してしまえばジャンにドッキングベイからレイブンクローで救出してもらうしかなくなるが、それは難しいだろう。船さえ飛ばなくさせれば、こっちにも秘密兵器がある。

「サム、ドッキングベイに着いたよ。どこにいる？」

ステラトは小声でコムリンクに話し掛けた。

『ああステラト。ちょうど良かったわ、今――』

すぐにサムの声がコムリンクから聞こえてきたと思ったその時、何かの雑音と共に声が途切れた。

「サム？」

音の正体は分からないが何かあったに違いない。ステラトはライフル銃を握りしめ、貨物船の影に身を潜めた。そっと顔だけ覗かせて周りの様子を確に認した。サムはこ

の近くにいるはずだ。しかし数人ではあるが警備の目を避けて探し回るのは危険が大きい。基地が小規模である反面、足音さえ響いてしまうほど船内が異常に静かなのはステラト達にとってあまりにも不利だった。

その時だった。耳を澄ましていたステラトのすぐそばで突然足音が聞こえた。後ろだ！サムか、それとも反乱軍か。ライフル銃の引き金に指をかけ素早く振り返った。

「何っ!?」

ステラトは思わず声を上げた。振り返った目と鼻の先に現れたのはステラトが予想もしない人物だった。バリカンヘアでフライトスーツを身につけている。反射的に引き金を引いたが、相手は素早く動きステラトの弾をよけた。

「誰だ！」

輸送船の裏側に回ったその人物を追いかけながらステラトは鋭くささやいた。小柄だがすばしっこいやつだ。しかし突然相手が隠れるのをやめてブラスターを構えて現れたので、ステラトは何歩か後ずさった。

「二対一は不公平じゃない。」

女性か。格好からてっきり男性かと思っていた。すると彼女のさらに向こう側から足音が聞こえた。

「何者よ。」

声と同時に現れたのはサムだった。
「ステラト!」
合流できた安心感で一瞬顔がほころんだが、サムはすぐに目の前のブラスターを向けている女性に集中した。どうやら彼女に撃たれてけがしたらしい。侵入するときにステラトにブラスターを預けたので、サムは武器を持ってなかったのだ。殺されていないのが奇跡のようだ。
「あなたも賞金稼ぎね。なぜここに?」
「そんなこと教えると思う?」
そのとたん、彼女の手からするりと小型の爆弾が滑り落ちた。それと同時に女性は二人の間から抜け出して走りだした。
「逃げろ!」
ステラトはサムの手を引っ掴むと慌てて貨物船の裏側に周り大きく前に飛び出した。
ドカーーーン!!
巨大な音とともに爆弾が爆発した。ステラトとサムは爆風の力も借りてぎりぎりのところで隣のXウィングの下に滑り込み降り注ぐ瓦礫と火の粉から身を守った。
「なんだよ、あの爆弾!」
小さい割に威力が尋常じゃない。

「爆発だ！ＳＷ１１３８がやられた！繰り返す！ＳＷ１１３８の付近で爆発だ！」
近くにいた警備隊がコムリンクで仲間に知らせる声が聞こえる。早くここから離れなくては。
「サム、行かないと！サム？」
しかし隣にいるはずのサムから返事がない。ステラトは慌てて振り返った。見るとステラトの足元が血で濡れている。
「サム！そんな・・・！」
ステラトはサムを抱え上げた。肩に細い破片が刺さってそこから血が滴っていた。
「大変だ・・・！」
ステラトが刺さっている破片を抜くと、サムはうっすら目を開けた。
「ステラト・・・」
ステラトはサムの傷口を手でふさいだ。強く押さえると何とか血の流れが止まったが、白っぽいステラトのグローブが真っ赤に染まった。
「サム！」
「一人で行って。後で行けたら行く・・・」
そこまで言うとサムはぐったりと力尽きた。冷たい手がステラトの膝から滑り落ちぶらりと垂れ下がった。

「嘘だろ・・・」
ステラトは何も考えられないままふらりと立ち上がるとブラスターを引きずってXウィングの下から出た。横たわるサムを何度も振り返りながら、ドッキングベイの安全な場所を探して足を速めた。

「止まれ！止まらないと撃つぞ！」
私なら止まらなくても撃つわよ、と心の中で怒鳴りながらキーラは体を半分ねじると追っ手に向かって矢を放った。残り４６本。矢は後ろで時間差で爆発し、反乱軍が悲鳴を上げる。キーラは追っ手を足止めしたことを確認し、先を急いだ。しかし、
「一緒に来てもらおうか。」
突然近くから声が聞こえた。ふと右を見ると、部屋のドアが開いていて、そこに反乱軍のフリートトルーパーが一人立っていた。まずい！キーラは慌てて振り返ろうと左を向くと、左側の部屋からもトルーパーが一人現れた。続いて廊下の前方二カ所、後方二カ所の部屋からもトルーパーが現れ、キーラは完全に包囲されてしまった。
「武器を床に置いて手を上げろ。」
前に立ちはだかった背の高いトルーパーが言った。キーラは弓をそっと地面に置くと、両手を顔の横に持っていった。こういう経験は一人で仕事をしていればよくあるこ

とだ。キーラはマンダロリアンの訓練を思い出した。マンダロリアンは普通一対一で決闘をするが、一方このアーマーには一人で多くの敵に応戦するための道具も揃っている。それに全ての操作はヘルメットでの音声操作なので相手に気づかれる心配もない。相手はこのアーマーについてどれぐらい知っているだろう。キーラが口を開くと、ヘルメットの横から伸びているセンサーがＴバイザーの前にガチャンと下りた。センサーで後ろも見えるようになった。敵は前に２人、左右に一人ずつ、そして後ろに３人。訓練でも行った設定だ。

「拘束しろ。」

目の前のトルーパーがそう指示を出し、左右にいた二人が手錠を持って一歩踏み出したその時、キーラは動いた。

バキューーーン!!

上げていた両手を歩み寄ろうとした二人に向け、リストガントレッドでまず二人倒した。前後のトルーパーがすかさずブラスターを構える。彼らが引き金を引くと同時に、キーラはジェットパックを作動させた。勢いよく上に飛び出したキーラは、あまり高くない天井にゴンッと鈍い音を立てて頭をぶつけたが、ヘルメットのおかげで何とか姿勢を保った。

「うわっ！」

標的がいなくなったブラスターの光線は向かい側にいるトルーパーに一直線に進み、相撃ちで二人倒れた。素早く着地し、リストガントレッドで残りを倒そうとした時、突然艦内に放送が流れた。一瞬周囲の空気が固まった。

「０６０８を実行する。衝撃に備えよ。０６０８を実行する。」

「え、何？」

キーラは思わず手を止めてトルーパー達を見た。トルーパーがポケットから両端にフックのついた紐のようなものを取り出し、片方を腰のベルトに繋いでいる。そして素早くもう一方を壁にいくつかついている小さいリングのようなものに取り付けた。その行為でキーラは何が起こるのか理解したが、すでに遅かった。

ガタンッ

突然船が揺れ、体が浮くような感覚が襲った。床が傾いている。キーラは急いでジェットパックを起動させようとしたが間に合わず、そのまま床を転がるとほぼ水平になっていた廊下の壁にドサッと落ちた。紐で船に体を繋いだ反乱軍の兵士達は上からぶら下がっている。縦に長い巨大なコルベット型のステルス船はコックピットを上にして立ち上がっているようだった。なるほど、何も知らないよそ者は、もしあのまま中央の通路にいたら真っ逆さまに一番下のドッキングベイまで落ちていたと言うことか。ガタンと船がもう一度大きく揺れ船が完全に地面に垂直になったようだ。このままで

は反乱軍に捕まって下まで連れて行かれるのが落ちだ。通路の奥に行けば上下に通じる秘密通路的なのがあるかも知れないが行く手はトルーパーに塞がれている。逃げ場は一つ。キーラはトルーパーの思惑に反して、吹き抜けになった中央の通路に向かって走った。

「ゲッ、高っ。」

一瞬遙か下に見えるドッキングベイからの高さにひるんだが、迷っている暇はない。反乱軍が追ってくる一歩手前でキーラは何もない空間へ大きく飛び出した。

レイヴンクローを反乱軍の基地から離れたところに向けて操縦していたジャンは、ステルス船の壁に貼り付いていた〝太っちょ〟が何かを感知し信号を送ってきたのでハンドルから手を離し手元のコンピューターを見た。〝太っちょ〟が感知したのは強い振動だった。地震だろうか。ジャンは〝太っちょ〟を遠隔操作して基地から引き離すと、基地全体を熱感知器でスキャンさせた。少しずつ送られてくるホログラム映像は先ほど見たものとは明らかに様子が違った。

「おいおい、形まで変えるのかよ。」

〝太っちょ〟を基地のある平地を一周させると、その全容が映し出された。さっきまで地面に横たわっていたはずのコルベット型ステルス船はコックピットを上に空高く

そびえ立っていた。侵入者を罠にはめたのだ。しかしキーラはジェットパックを背負っているし、あのタロンなら気合いで飛べるだろ。ジャンはタロンが持っているコムリンクに呼びかけた。

ちょうど取り囲んできたトルーパーを倒し通路のさらに奥へ向かおうとしたところで船が揺れた。タロンは中央の通路に身を投げ出されないようにつるつるの壁のちょっとした出っ張りに何とか掴まり持ちこたえた。

『タロン、無事か。』

基地が動いたことを察したジャンから連絡が入り、ひとまず互いの無事を確認しホッと息をつく。

「俺は無事だ。ほかの三人もたぶん大丈夫だろう。ステラトとサムはすでにドッキングベイに着いているはずだ。」

『いいか、よく聞け。状況は厳しいが有利になった面もある。船の裏が見えるようになってエンジンの位置が分かりそうだ。〝太っちょ〟が送ってきた映像を今解析してる。』

「なるほど。」

やはりジャンは有能だった。船を立ち上げたと言うことはエンジンは船の底に地面

に向かってついている可能性があるとのことだ。ということは反応炉もその近くにあるのではないかと推測し太っちょで詮索しているらしい。ジャンを連れてきたのは正解だった。

『よし、出たぞ。エンジンがコックピットの近くと船尾のドッキングベイに二つついている。今動いたのはコックピットの方だ。反応炉はちょうどその間の船底ほぼど真ん中にある。そこに向かって進め。』

船底か。だいたいの場所が分かりなんとかたどり着けそうだ。

「了解。ジャン、また何か分かったら知らせてくれ。」

タロンはコムリンクをしまうと通路を先に進んだ。どうやって反応炉まで行こうかと船内の様子を探りながら、タロンはジャンに聞いたことをレッドに伝えようと再びコムリンクのスイッチを入れた。

「おいレッド、聞こえるか。」

しばらく待ったが返事がない。こんなときにヘルメットを脱ぐはずはないから聞こえているはずだ。

「レッド、何をやってる。返事をしろ。おい、嘘だろ。」

タロンは反対側の廊下にいるはずのレッドの様子を見に慌てて中央の通路に向けて走ったが、途中でふと立ち止まった。ジェットパックで上へ向かったらしいレッドが突

然すごい速さで上から落ちてきたのだ。
「何っ！」
下に落ちる前に助けなければ。でもどうやって。先ほど倒した敵反乱軍がロープか何かを持っているかも知れない。タロンは転がっている遺体の一つに慌てて近づいたが、しゃがみ込もうとしたタロンの肩をブラスターの光がかすめた。反乱軍だ！タロンは振り返りブラスターを撃ち返した。しかしとっさのことで光線は外れ壁に当たって消滅した。ふとブラスターを撃ってきた相手を見た。それは反乱軍のフリートトルーパーではなかった。
「タロン。」
その男は聞き覚えのある低い声でタロンの名前を吐き捨てるようにつぶやいた。頭に分厚く巻いたターバンに、茶色く色あせたバトルアーマー。そして今タロンを撃ったものであろう、手にした細長いヘビーブラスター。
「デンガー———」
タロンは唸るように言い返した。彼とはクローン戦争中に知り合ったが、決していい思い出はない。あの頃のデンガーは最強だった。当時はアーマーにしゃれた模様を入れており、よく冗談を言う奴だったのでタロンはなめてかかっていたのだ。彼の賢さと残虐さは銀河中にその名を広め、今では最も危険な賞金稼ぎとして数えられている。

　クローン戦争時、まだ一匹狼だったタロンは賞金を巡ってデンガーと対峙した。互角に戦ったが最後には形勢不利になり逃げ去ったのでその後デンガーが賞金を受け取ったのかどうかは分からない。彼の頭に人工回路が埋め込まれていると知ったのはその時だ。
「まさかおまえもこの仕事に呼ばれていたとは。」
「争っている暇はないんだ。ここは道を譲ってくれないか。」
「相変わらずの臆病者だな、タロン。分かってるんだろ。お前は俺に勝つことはできない。それにどうやらお前はチームを組んで仕事をしているようじゃないか。」
　タロンはデンガーの相手を小馬鹿にした言い方に腹が立った。前にタロンに勝ったことでいい気になっているのだろう。しかしその一方、戦った際に人工回路の一部を壊されたことは未だに許せないらしい。
「チームを組むことで得られたこともある。」
「一人前の賞金稼ぎは一人で仕事をこなす。」
　デンガーはまだブラスターの引き金に指をかけている。いつそれを引くかとタロンはデンガーに受け答えしながらも集中した。二人の間を包む空気は周りの世界から隔離し妙な緊迫感が走った。お互い目を反らさなかったがこれ以上にらみ合えば火花が散りそうだ。

「一人前でなくて何が悪い。」
デンガーとタロンはほぼ同時に引き金を引いた。

ステラトの目の前には奇妙な光景が広がっていた。数々のスターファイターや貨物船が壁に貼り付いている。ラムダ級シャトルやニュー級アタックシャトル、Xウィング、Yウィング、そしてスカリフの戦い以降姿を見なかったUウィング（個人的は一番お気に入りだ）も、全て壁、というか垂直になった床に固定されている。ドッキングベイの何カ所かに脚立が用意してあり、この状態でもビークルに乗り込み離陸できるようにしてあった。敵ながら感心する。この僕を超える天才が現れたようだ。

突然背後でドサッという音の後に耳をつんざくような大きな音が聞こえステラトはくるりと振り返った。上から何かが落ちてきたのだ。そこには先ほどまでなかった青いシャツを着た反乱軍兵士の遺体がいくつか。それに遠目からも見てすぐに分かった独特な形の金族の塊。暗殺ドロイドだ!.すると直後にドッキングベイの左右から反乱軍が次々現れ、落ちてきたドロイドに向かった。

「ああまずいな・・・」

もちろん心配したのは自分のことでも暗殺ドロイドのことでもない。反乱軍はIG—88がどんなに残酷で危険な奴かを知らない。奴を知っている者なら、警戒なしに近

づいたりしないのだから。人間に似た形のそのドロイドは予想も付かないような動きをする。

「おい、ドロイドだ。」

「壊れてるだろ。きっと賞金稼ぎどもが送り込んできたんだ。」

「帝国のドロイドだったら貴重なデータが得られるかもしれないぞ。本部に届けよう。」

ステラトは壁に貼り付いたＸウィングによじ登り、遠目から様子を見守った。２、３人の反乱軍兵士がドロイドを動かそうとさらに近づいたとき、突然倒れていたドロイドがあり得ない速さで立ち上がった。

「うわっ！」

反乱軍が驚いて飛び退いたときにはすでにＩＧ―８８は２丁のブラスターを構え反乱軍に向けていた。

「逃げろ!!」

ＩＧ―８８がブラスターを乱射し始めた。腰から上を３６０度回転させながら四方八方に光線をまき散らす。ステラトのいる方にも飛んできて、Ｘウィングの影に慌てて身を隠した。反乱軍兵士は手も足も出ないうちに一瞬で倒された。第二弾の反乱軍が現れる様子はない。ここへ来るよう指示された不幸な兵士たちはこれで全部のようだった。静かになったドッキングベイの中央に立ち尽くすＩＧ―８８に見つからない

ようステラトは呼吸をするのもやめてその場に固まった。ＩＧ―８８はステラトとは反対側へ歩き去って行ったようだった。とりあえず一安心。大きく息を吸った。

しかしステラトはこの状況が自分に非常に不利なことに気づいていた。すぐにも反乱軍がこのドッキングベイに集まってくるに違いないし、ＩＧ―８８もまだ近くにいる。長い間ここにとどまるのは危険だ。反乱軍の逃げ道を断つためにまずはこのビークル達に爆弾を仕掛け破壊しなければいけない。しかしビークルが壁に貼り付いている今、これら全てに爆弾を仕掛けるのは難しかった。それに、サムもいない。あの時サムを殺した賞金稼ぎは何者だったのだろう。それにＩＧ―８８。なぜ偶然にも同時にこのマルーン基地に賞金稼ぎが集まっているのだろう。

やらなければいけないことは明確だった。全部の船に爆弾を仕掛けるのは無理でも、一つ置きなら間に合うはずだ。タロンとレッドがなんとかステラトはジャンの巨大ブラスターを地面に置くと、小型爆弾の詰まったカバンを肩にかけ直し一番端のＸウィングから仕掛けにかかった。

伝説の賞金稼ぎ　第６章

ジェットパックは一瞬のうちに起動した。しかし最初の噴射で何かがおかしいとキーラは気づいた。いつもやっているはずなのにバランスがうまくとれない。早くどこかに着地しなければ。しかしそのどこかを見つける前に、突然ジェットの勢いが衰え、消えた。こんなこと初めてだ。まだ燃料は切れていないはずなのに。一瞬体が空中で浮き、目の前で白い壁が静止した。

「げっ、」

次の瞬間、キーラは背中から真っ逆さまにドッキングベイに向かって落下していた。

「うわあああああ!!!」

キーラは肩にかけた弓を何とか掴もうと体をひねったが、弓は手の届かないところに流されてフックの付いたトリックアローを放つどころか余計に速いスピードで落下している気がする。このまま落ちたら間違いなく気絶、いや、死だ。何とか弓を手に・・・その時、キーラの横を何か黒っぽいものが猛スピードで通りすぎた。今のは何？

バシッ

「え？」

突然キーラの腕が捕まれた。全てが一瞬の出来事のはずなのにまるで時間の流れが止まったかのように今まで流れていた景色が逆向きに変わり、何者かに上に引っ張られている一連の動作がゆっくりに感じた。キーラはそっと上を見た。そして驚きに目を丸くして息をのんだ。まさか。なぜ彼がここに？腕が邪魔して少ししか姿が見えないが、それが誰だかすぐに分かる。キーラの憧れの的であり、かつて少しの間だけ共に戦った、銀河最強の賞金稼ぎ。キーラと同じような形の緑色のアーマーで身を包んだその姿は銀河中の賞金稼ぎで知らないものはいない。ボバフェットがそこにいた。

ボバはキーラをつれていくつ目かの横に通じる通路に着地した。アーマーを身につけていてかなり重かったはずのキーラを軽々放り投げてキーラは壁に思いっきり頭を打った。（今日で何度目だろう）

「痛たたた」

ヘルメットの上から頭をさすりながらキーラは通路の端に立っているボバ・フェットの方へ向き直り、ゆっくり立ち上がった。背中、いや、ジェットパックを向けて立つその姿は数年前に見た彼と変わっていない。しかし緑色のマンダロリアンアーマーはいくつもの戦いを経てさらに傷を増したように思えた。

「なにやってるんだ。」

ボバはキーラの方を向かずにあきれた口調で言った。変成器で声が変えられている

が、ボバの声に変わりはない。懐かしさに今ある状況も忘れ心が躍った。
「いや、なんかジェットパックが壊れちゃったみたいで・・・」
「ああ、見れば分かる。」
　キーラはかっこ悪い姿を見せてしまったことに少し落ち込んだが、それよりも彼に助けられたことが嬉しかった。あまり他人のことを気にかけたりしないと分かっているから余計に。しばらく通路の縁から下の様子を見ていたボバが突然振り返って通路の奥に向かって早足で歩き出したので、キーラはちょこちょこボバを追いかけながら何か話しかけようと慌てて口を開いた。
「でもどうしてここに?そんなことより、会えて嬉しいわ。４年ぶりよね、積もる話が――」
「黙ってろ、反乱軍に見つかるぞ。それよりこっちが聞きたいな。船もろくに操縦できないお前がどうやってここに来た?何のために。」
「もう操縦できるってば!」
　ボバは通路の奥まで来ると足を止めて壁に身を寄せ、誰もいないことを確認してキーラの方を振り返った。
　キーラはかつて２年間、ボバにマンダロリアンとしての訓練を受けていたことがある。武器の扱い方や船の操縦の仕方は（当時は全くうまくいかなかったが）全てボバに

教わったのだ。このマンダロリアンアーマーもその時に作ったもので、それ以来ずっと身につけている。ボバと出会った経緯は話せば長いがよく覚えている。それ以来ボバはキーラがこの世で最も尊敬する人物であり、目指すべき頂点だった。だから会うとつい興奮してしまうのだ。

「仲間の賞金稼ぎと来たの。帝国からの依頼よ。」

キーラはできるだけ大人っぽく聞こえるように落ち着いて答えた。

「仲間など信用するなと言ったはずだぞ。」

ボバは吐き捨てるように答えた。ボバに訓練されていた頃いつも、誰も信用するな、と言われていた。まだ未熟なキーラはあまりよく理解していなかったが、きっとかつて仲間に裏切られてひどい経験をしたに違いない。ボバは自分の生い立ちを全く話してくれなかったため想像の範囲でしか分からなかったが。

「しかし、帝国からとはな。おそらく俺の受けた依頼と同じなのだろう。」

「同じって?」

その時、突然キーラのヘルメットの内側に付いているコムリンクが反応した。

「待って、仲間から。」

キーラはボバにそう言って、コムリンクからメッセージを受け取った。

『レッド! 無事か! 無事なら返事をしろ!』

息切れしたタロンの声が聞こえてきた。かなり焦っている様子だ。
「無事よ。何かあったの？それより今どこに――――」
『お前が反対側の通路から落ちるところを見たんだ、しかし無事ならいい。』
なるほど、タロンが焦っているのはそのせいだったのか。
『今どういう状況だ？』
「ああ、えーっと、」
キーラはチラッとボバの方を見た。言った方がいいのだろうか。もしかしたらボバが味方に付いてくれるかもしれない。しかしそれを察したらしいボバは指を立てて自分のことは言うなという風に無言で示した。
「どこかの通路にいるわ。さっきいた位置より下だと思う。」
『分かった。ジャンから反応炉の位置が特定できたと連絡が入った。船底の中央だそうだ。』
「分かった。」
『ああそれと、デンガーという頭にターバンを巻いた賞金稼ぎを見なかったか？』
キーラは一瞬なぜタロンがそんなことを聞くのか不思議に思った。
「デンガー？いいえ、見てないわ。」
キーラがそう答えるとタロンは通信を切った。

「デンガーだと?」

キーラが話し終わったとたん、ボバが急に尋ねてきた。ボバは何か考え込んでいる。キーラより何倍も頭がいいからきっと自分には分からないことだ。だがキーラはこうやって無言で考え込んでいるボバが好きだった。立っているだけなのに、威厳と聡明さを感じさせる。

「なるほど、つまりこれは帝国から俺たちに向けたテストってことか。」

「テスト?」

「ああ、俺たちは別々に同じ仕事を依頼された。始めからおかしいと思っていた。こんな仕事一人の賞金稼ぎに任せるようなものじゃない。帝国が自ら潰しにかかった方が早いからな。つまり、不可能な仕事で賞金稼ぎたちを戦わせて生き残った奴らは報酬と共に次の仕事を与えられる。ここまで来るのにすでに何人かは失敗してるはずだしな。」

「なるほど・・・」

そう考えればボバとこんなところで鉢合わせたのにも納得がいく。きっとタロンもそのデンガーという賞金稼ぎにこの基地の中で出会ったのだろう。帝国からのテストか。ということは、今はボバともライバルというわけだ。かつての師匠がライバルだなんて、なんだか一人前になったようでキーラは胸が躍った。ボバは成長したと思ってく

れているだろうか。
「お前はもう行け、キーラ。俺はやるべきことがある。」
「あ、でもまだ話が・・・」
　次にいつボバに会えるか分からないと思うと出来るだけ長く話したかった。しかし自分とてそんな余裕がないことは分かっていた。タロンと反応炉で合流しなければならない。
「これが終わったら話ぐらいいくらでも聞いてやる。」
「本当に!?」
「生きて帰ってこれたらな。」
　その余裕たっぷりの言い方は、相手がキーラであっても容赦しないということを暗示させていた。キーラは一瞬ボバの本気を想像してギクッとしたが、意を決して前を向いた。ボバはもう中央の通路に向けて歩き出していた。
「あ、ボバ。助けてくれてありがとう。」
　ボバは一瞬振り返ったが、そのまま無言で通路の上へと姿を消した。

「レッド!こっちだ!」
　タロンに呼ばれ、キーラは無事反応炉の前で合流した。

「これでステルス装置も壊れるし船も飛べなくなる。そうなればこっちのもんだ。」
タロンとキーラは巨大な反応炉を前にして立ち尽くした。いくつもの電源ケーブルや機械が混み合っており、その間を縫うように張り巡らされた足場を歩くことができるようだった。
「問題は、ここを壊したらすぐに反応炉から離れなきゃいけないってことね。きっと連鎖反応で爆発する。」
「デトネーターを仕掛けよう。」
反応炉へと足を踏み入れながら話すと周りを取り囲む金属板に声と足音が反響し反応炉中に響き渡った。二人分以上の足音が聞こえている気がする。
「おい、誰かいるのか？」
至る所にある壁や機械に跳ね返ってこだました足音を聞き、タロンがそう尋ねた。
「違うわ、響いてるだけよ。」
「いや、もう一人いる。」
「え？」
タロンが急に足を止め、キーラもつられて止まった。余韻が残る中、微かな足音が、確かに聞こえてくる。姿は見えないがそう遠くない。
「見えても撃つなよ。どこかに当たったら大変だ。」

タロンが横で囁いた。この小さな足音をよく聞き分けられたものだ。緊張感あふれる面持ちで壁に身を寄せ、相手が居る方向を特定している。キーラもヘルメットの耳の横から伸びたセンサーをおろし、前後に広がる視界と音に集中した。ピッピッと反応炉の装置が機械的なリズムを刻み、足音の相手はキーラ達が止まったことに気づいたのか先ほどよりいっそう忍び歩きをしているようだ。

「おい。」

タロンが突然キーラに話しかけたのでキーラは小さく飛び上がった。

「それ、置いてけ。壊れてるんだろ、邪魔になるだけだ。」

そう言ってタロンはキーラのジェットパックを指した。

「ああ、そうね。」

キーラはジェットパックを背中から下ろすと壁に立てかけた。ボバと訓練を始めてからずっと使い続けていた赤とシルバーのジェットパックは寿命を終えた。キーラは少しだけ懐かしいような悲しそうな顔をしたが、ヘルメットに隠れて誰にも見えることはなかった。

「こんな時に壊れるなんて運が悪いな。」

「昔から不幸体質だから。」

「なんだそれ。」

「反応炉に2人発見。直ちに拘束する。繰り返す、反応炉に2人発見・・・」
「あっ」
相手があまりにも姿を現さないので気を抜いていた。気づけば反乱軍のトルーパーがタロンのすぐ横まで来ていてブラスターを向けていた。
「ちっ」
タロンは素早く動いた。ポケットに隠していたサーマルデトネーターを取り出しスイッチを入れると反応炉の中央に向かって思いっきり放り投げた。その隙にキーラは弓でトルーパーを殴り倒した。しかし、
「いたぞ!」
さらに2人のトルーパーが姿を現した。
「出口に向かって走れ!」
反応炉の中でブラスターを撃ってこないことは明らかなので追いかけっこをしたい気持ちも山々だったが、サーマルデトネーターが爆発すればおしまいだ。タロンとキーラは一斉に来た道を全速力で走った。それも前から迫り来る反乱軍を足場の下に突き飛ばす勢いで。突き落とされた反乱軍の悲鳴が反応炉に響き渡る。
「出たら右へ曲がるぞ!」
「そっちは反応炉の真上でしょ!真ん中の通路に飛び降りる!」

「忘れたのか、ジェットパックは壊れたんだろ！」
２人はぎゃあぎゃあ言いながら走り、なんとか反応炉から出て中央の通路に向けて進んだ。
「まだ秘密兵器があるもんね！」
キーラは様々な種類の矢の中でも一番太いものを取り出した。
「なんだそれは。」
「まあ見ててよ。」
矢を弓につがえ何やらスイッチのようなものを発動させながら、キーラはそれを壁についているフックへ向けて放った。
ガチャン
壁に刺さる直前、矢の先が開いて鉤のような形になり、その先っぽが見事にフックに命中してひっかかった。よく見ると矢の後ろから黒いロープが伸びている。
「ほら、早く捕まって！」
キーラがタロンに向けて手を伸ばしたことで、タロンは彼女が何をしでかすつもりなのか察した。
（これは、いわゆるターザン・・・）
実は高いところが苦手なタロンは少しだけ恐怖で足がすくんだが、後ろから反乱軍の

トルーパーが迫ってきているのでそうは言っていられない。キーラの手をとった瞬間、体ごと強く引っ張られ、ふわりと浮く感覚を覚えた。そして気付いたら重力に任せて縦になった船の中央に通路を真っ逆さまに落下していた。

「うわっ！」

ロープが伸びきると同時にキーラは強く体を振って下の通路に着地した。タロンは一生懸命になって振り回され、顔を床にしこたま打ち付けた。

「痛った!!」

「男なんだからちょっとは我慢してよ。」

「そういう問題じゃないだろ！絶対鼻折れたぞこれ・・・」

しかしそんな言い争いも、上から降ってきた凄まじい爆発音にかき消された。一度目の爆発が起こり、続けて連鎖的に何度も巨大な爆発が船全体を大きく揺らした。

「どうやら反応路が爆発したようだ。」

「ってことは私たち船を無効化したってわｋ――」

キーラが言い終わらないうちに突然船の床がグラリと揺れた。二人は吹っ飛ばされないように慌て壁にしがみついた。

「船がっ！」

先ほどの爆発で船がバランスを崩し、立ち上がっていたのが横に倒れていっているよ

うだ。
「衝撃に備えろ！」
　今度は船が立ち上がったときの比ではない。エンジンが機能していないのでこの巨大な物体が硬い岩盤に打ち付けられる衝撃が直に伝わってくるはずだ。そこらかしらから悲鳴が聞こえ、船内は地獄図状態である。
　そんな中、キーラとタロンのコムリンクに状況にそぐわない呑気な声が入ってきた。
『お見事、船を無効化したようだな。』
「何がお見事だ！今の状況が分かってるのか！」
『ああ。〝太っちょ〟からの映像が
　バッチリ送られてきている。大丈夫だ、その船の外壁は全体がチタニウム加工を施されている。それぐらいの衝撃には耐えるだろう。それにここの重力はそう大きくないしな。』
「なんでもいいが、船は完全に無効化されたんだな？」
『ああ、エンジンが機能を失った。これで暴れ回っても大丈夫そうだぞ。』
「よし、では後は作戦通りだ。」
　コムリンクが切れ、船は完全に元通り横向きに倒れた。どうやら崩れることはなかったようだ。

「よし、ここからは別れるぞ。お前は本部を探せって俺はコックピットの方へ向かう。」
「了解。」
キーラとタロンは頷き合うと、互いに背を向けてその場を後にした。

船が横に倒れた衝撃を床に固定されていたXウィングのコックピットの中で耐えていたステラトは、秘密兵器を抱えてドッキングベイの中央に向けて歩いた。貨物船の一つを陰にして作戦の準備に取り掛かる。本当はサムもこの場にいるはずだったが、一人でやる以上周囲への警戒を怠れない。

ジャンに渡された兵器は、巨大なブラスターのような形をしたもので、床に固定して扱う銃の一種だ。銃口から飛び出すそれは光線や実弾ではなく円盤状に広がるエネルギー波。ようは小型サイズミックチャージだ。本来のサイズミックチャージは小惑星をも破壊する威力を持つが、これはせいぜいこのドッキングベイ内の船を破壊する程度。ブラスターを中心に円形波が広がるので、その中心にいる者には影響を及ぼさない。つまりこれは使う者を巻き込まない非常に優れた爆弾なのだ。特殊な周波数のエネルギー波はまわりの爆発物の威力を増幅させる力を持ち、ステラトがあらかじめ仕掛けたいくつかの爆弾を同時に爆発させればドッキングベイ内にいる人や船は一発で片づく。

後はここに出来るだけ多くの反乱軍を引き寄せるだけ――――

ステラトはドッキングベイ内に何人かの足音を確認し、隠れていた貨物船の後ろからタイミングを見計らって姿を現した。ドッキングベイ中央に、足元に巨大ブラスターを構えて立つステラトの姿は非常に目立ち、反乱軍の兵士はすぐに気づいた。

「侵入者を発見！応援を頼む、ドッキングベイ内に侵入者を発見！」

（そうだ、もっと連れてこい・・・）

ステラトは念のため背中に背負っていたブラスターライフルを手に取り引き金に指をかけながら、内心で自ら罠にはまってくる反乱軍にほくそ笑んだ。

「そこを動くな！」

応援のトルーパーも数を増やし、前と後ろの両側から反乱軍が迫ってくる。おそらく全部で３０から４０人程度。ＩＧ―８８にやられたときのことを思ってか、慎重に近づいてくる。

「武器を下ろして手を頭の後ろに組め！」

先頭にいたトルーパーがステラトに命令してきた。

「僕が易々と従うと思う？」

ステラトはトルーパーの方を向きながらも、常に足元の小型サイズミックチャージに注意を向けていた。どのタイミングで使おうか。爆弾のスイッチも同時に押さなけれ

ばいけないから怪しまれないように動こう。
「かなり焦ってるな。船が使えないし、もうここしか逃げ場がないのかな。でも残念、Ｘウィングは使えないよ。」
　ステラトは反乱軍全員に聞こえるように大声で話しながら、さり気ない素振りで片手を爆弾のスイッチが入っているはずのポケットに突っ込んだ。しかし、
（しまった・・・！スイッチはサムが持ってるんだった！）
　背中に冷や汗が流れた。万事休す。すでにサムの行方はわからないし、一か八かでサムが生きていて戻ってきてくれるのを待つか――――
「多勢に無勢だ、賞金稼ぎよ。帝国からの依頼か？馬鹿なものだ。たった数人で乗り込んでくるなど。」
「そのたった数人に船を無効化されちゃってるけどね。」
　ステラトは何とか時間稼ぎしようと話を続けた。先頭のトルーパーは威嚇するように一歩、一歩とステラトに近づいてきた。
「今や帝国では闇の帝王がシスの脅威を振るっているが、残念ながらお前は我々を脅かす対象ではない。シスの側にいる普通の人間だ。」
　ステラトとトルーパーは数メートルの空間を挟んで向かい合っていた。
「奴らの側かもしれないが、一秒たりとも思うな。僕が、奴らの一人だなんて。」

その瞬間、反乱軍が目に見えて怯んだ。その隙に確認できた上の方でちらりと動いた人影にステラトは全てをかけた。

『今行く。』

「なーんてね！僕がシスなんて信じてるとでも思った？」

ステラトはそう叫ぶと、自分の元に人影が飛び込んで来るのと同時に床に固定してあるブラスター型サイズミックチャージの引き金を引いた。

ブオオオオオオン

独特な振動音とともに青白いエネルギー波が一気にステラトたちを中心に広がった。それと同時に、ドッキングベイをぐるりと囲むように仕掛けてあった爆弾が巨大な音を立てて爆発した。反乱軍は叫び声を上げて逃げ惑うがそのエネルギー波の広がるスピードに勝てるはずはなく、一瞬のうちに一掃された。

その波の中心で、ステラトは自分の傍らに爆発のスイッチを握りしめて佇む友の姿を信じられない思いで見つめていた。

「サム！生きてたのか!!」

「勝手に死んだことにしないでよね。後で行くって言ったでしょ。」

サムは大量に出血し見るからに貧血で、痛々しいほど青い顔をしていたが、ステラト

は彼女が生きていただけで十分だった。きっとどこかでタイミングを見計らっていたのだろうが・・・

「サム、今上から降ってこなかった?」

「ああ、あの天井の蓋みたいなところの中にいたのよ。」

当たり前のように言うサムにステラトは目を丸くした。

「あの高い天井から自由落下してきたって言うのかい!?」

「まさか! レッド会ってにこれを渡されたの。何かに使えるかもってね。まさかこんなにすぐ役に立つなんて。」

そう言ってサムがステラトに差し出したのは、両先にフックとロープがついた矢だった。

「レッドに感謝しないと。」

ステラトはそう言ってサムに笑いかけると、二人そろってドッキングベイを出るため出口に向かって歩き出した。